

「オネエ所長の調査ファイル」 # 24

山崎浩治

1

「女装はいまに始まったブームじゃない。日本人の体にはオネエの遺伝子が宿ってるの。ヤマトタケル、歌舞伎の女形、牛若丸に弁天小僧。みんな女装してるでしょ。里見八犬伝にだって女装者がいるわ」

「そういえば昔、ヤマトタケルを演じた三船敏郎が女装してる映画がありましたね。不気味なところが所長とソックリでした」

「志村喬が女装した『世界のミフネ』を見て『美しい』とつぶやくの。日本映画史に燦然と輝く名場面でゾクゾクしちゃった！」

「それ、珍場面の間違いですから！」

「金沢プライベート・リサーチ」のオネエ所長、市山とイケメン調査員の透が金沢市内の住宅街で聞き込み中だ。この日の市山は白のトップスとマキシ丈スカートの上にロングカーディガンをコートのように羽織り、シックに女装している。

今回の依頼人は金沢市に住むパート主婦の恵(32歳)である。3年前に会社員の将樹(32歳)と結婚、子どもはいない。市内の賃貸アパートで平穏な生活を送っていたが、1週間前、将樹の元カノを名乗る亜美(35歳)から「来年小学校に上がる私の息子は、あなたのご主人の子ども。息子のために離婚して」と刺々しい声で電話が入る。

その夜、帰宅した夫を問い詰めると、独身時代から結婚後もしばらく亜美と交際していた事実を認めた。「女の息子が本当に夫の子なのか調べてほしい」と依頼を受けた市山と透が周辺調査をしているのだ。

亜美は会社員の剛(36歳)と3カ月前に協議離婚、一人息子の颯太(6歳)と実家に帰り、いまは再就職を目指して職業訓練校に通っている。家族や友人には「夫のDVが離婚の原因」と話しているらしい。保育所に通う颯太を確認してきた透が市山に報告した。

「息子は年長児にしては大柄でした。亜美の元夫は小柄だし、依頼人の夫はすらりとした長身。顔立ちも心なしが依頼人の夫に似てましたね」

「いずれにせよ、その子が依頼人の夫の子どもかどうか調べるにはDNA鑑定するしかないわね」

2

「相手の女は、お金目当てではないんですか」

数日後、「金沢プライベート・リサーチ」にやってきた恵が口をとがらせると、市山が首を振った。

「その可能性は低いと思うわ。お金が目的なら、ご主人に電話したでしょう。この子はあなたの子だから養育費を払え。さもないと奥さんに言うよ、ってね」

「それって恐喝でしょ！」

「男と女は1回でもやっちゃうと、男女関係のもつれで刑事事件にならないのよ。ご主人は彼女と不倫してたことを認めているし、せいぜい民事事件ね」

恵が悔しそうに口をつぐんだ。

「相手の元夫も調べたわ。夫のDVが離婚原因と彼女は主張してるけど、元夫は誰に聞いても子煩悩で善良な人物なの。そこがちょっと解せない。でも、すでに離婚している以上、本気でご主人と結婚を望んでいると考えた方がいいわね」

恵の横顔に苦悩の色がにじむ。

「それで、あなたたちはどうするつもり？」

「夫は、女とはすでに別れている。家庭を壊す気はない、と言っています」

将樹は2年前、亜美の元夫が夜勤主体の工場勤務から日勤の営業マンに異動したのを機に別れたと恵に白状している。

「あなたは？」

「結婚後もしばらく付き合っていたことは腹立たしいですが、『別れると関係をばらす』と脅されていたというし、許そうと思っています」

「仮に相手の息子がご主人の子どもだったとしても？」

「……ええ」

「だったら、あなたの気持ちを毅然と伝えなさい。その上で出方を見てください」

恵が「離婚をするつもりはない」と伝えると、亜美はただちに元夫と息子に親子関係がないことを法的に確認する「親子関係不存在確認」調停を家庭裁判所に申し立てた。申立人は颯太だが、未成年者のため亜美が代理人となっている。DNA鑑定の結果、剛と颯太に親子関係がないことが判明。亜美はそのことを記載した調停調書に基づいて息子の除籍を申請、続いて将樹に認知とDNA鑑定を求める「親子関係存在確認」調停を申し立てた。

3

今年のお盆、妻の実家に行った時、何かの拍子で血液型の話になり、亜美の血液型がB型であることを知った。妻と颯太がちょうど風呂に入っていた時のことだ。

「亜美はA型でしょ。本人はそう言ってましたよ」

「それは剛さんのカン違いよ。あの子は間違いなくB型。だってあたしたちは夫婦そろってB型だもの」

きっぱりと断言した義母の言葉に血の気が引いた。亜美がB型なら、A型の息子が生まれるはずはない。剛の血液型はO型であるからだ。

とっさに思い浮かんだのは、颯太が取り違えられたのか、ということだった。けれどいまは昭和の時代ではない。そもそも亜美が出産したのは彼女の実家に近い小さなレディースクリニック。颯太と同時期に生まれた新生児がほとんどいなかったことを思い出す。だとすれば、息子はオレの血を分けた子どもではないのか！

その日から芽生えた不信感を、剛は胸に秘めておくことができなかった。ある時、母に相談す

ると、事態は大問題に発展していく。

「ずっとおかしいと思ってきたのよ。あの子、剛にちっとも似てないじゃない！」

颯太が成長するにつれ、父親に似ていないことは親戚の間でも秘かに評判になっていた。しかし、亜美は「男の子は母親に似るもの」と少しも意に介さず、剛もまた、その言葉をすっかり信じ込んでいたのだ。

「颯太は本当に剛の子どもなの？ 嘘はやめてちょうだい。場合によっては出るところに出てDNA鑑定をしてもいいんだから」

母の厳しい追及に、亜美はあっさりとして颯太が剛の子ではないことを告白した。相手は剛が工場勤務で夜勤が続いたころ、出会い系で知り合った男だという。相手の男の住所を聞き出し、首実検しに行った母が数日後、興奮して帰ってきた。

「颯太はあっちの男に似てるわ。ううん、目鼻立ちなんてそっくり！ 生き写しよ！」

鳥のカッコウは自分で子育てせず、我が子をほかの鳥の巣に卵を産み、育てさせると聞いた。オレはカッコウの`育ての親鳥、のように他人の子どもを育てていたのだろうか。剛の両手が腹立たしさに小刻みに震えていた。

4

「独身時代の若気の至りとはいえ、人妻相手に避妊もせずにセックスするってあなた、どういう見だったの？」

「金沢プライベート・リサーチ」に恵とともに相談に訪れた将樹に市山が詰問した。

「ダンナとの間に子どもができず、不妊治療中だと言ってたんです。もしも子どもができたら、ダンナの子どもとして育てるって」

妻の隣で小さくなった将樹が目泳がせながら早口で答える。

「あなたはそれを真に受けたわけ？」

「……はい」

聞こえよがしに嘆息した市山が続けた。

「それにしても、相手の女は夫のDV話といい、不妊の話といい、`せんみつ、の女かもしれないわね」

「せんみつ？」と将樹が怪訝な顔で聞き返す。

「本当のことは`千のうち三つ、という虚言癖ってこと」

「オレ、DNA鑑定を拒絶することはできませんかね」

すぎるように質問した将樹に、市山がぴしゃりと言った。

「別に拒絶したって構わないけど、調停が不調になって裁判になったら、どのみち裁判所からDNA鑑定を求められるわよ。その時、あなたが鑑定に応じなければ敗訴は免れない。コソコソ逃げてないで応じなさい」

「けど、もしオレの子どもだとなったら……」

「認知するしかないでしょう」

二人のやりとりを聞いていた恵が苛立ちを隠せない口調で割り込んできた。

「認知すると、養育費を払わなきゃいけないんですよね？」

「法律上の親子関係が確定すれば、扶養義務や相続義務が生じる。しょうがないわ」

市山の言葉に、夫婦が恨めしそうに押し黙った。

「ただし、反撃の方法が一つある」

5

将樹はDNA鑑定で親子関係が証明された颯太を認知、月3万円の養育費を支払うことを了承した。同時に恵は市山のアドバイスに従って亜美に対し、不倫によって精神的苦痛を受けた慰謝料として200万円の損害賠償を求め、調停を申し立てる。弁護士を介した度重なる話し合いの末、慰謝料を支払う経済力のない亜美は養育費と損害賠償を相殺することで調停は成立した。

「プライベート・リサーチ」で市山と透が調査を振り返っている。

「相手の女にとって今回の一件は何だったのかしら」

「元夫は息子との親子関係まで否定する意思はなかったそうですね、所長」

「6年間我が子として暮らしたのよ。いまさら他人になるのは忍びなかったのね。養育費だって払うつもりだったらしいわ」

にもかかわらず、亜美は元夫と離婚した上に息子との親子関係まで否定し、剛から養育費をもらう権利を失った。一方、将樹と颯太の親子関係は法的に認められたものの、将樹と亜美は結婚するには至らず、養育費と慰謝料が相殺されて差し引きゼロとなる。

「結局、残ったのは息子が認知されたという事実だけじゃない。彼の戸籍には認知されたことが記載され、`夫婦関係のない男女の間に生まれた子ども、として生きていかなきゃならなくなったのよ」

それから半年後のとある週末、市山と透が様子を見に行くと、剛と颯太が公園の芝生の上でサッカーに興じていた。母子はいまも実家で暮らしているが、剛の要望で離婚後も月に2回ほど面会を続けているらしい。法律上は親子関係を否定された二人だったが、楽しそうにサッカーを続ける姿はどこから見ても仲のよい父子だった。

「颯太、帰るよ！」

迎えに来た亜美が公園に現れると、颯太が「パパ！」と叫んで剛の腰にしがみつき、離れようとしなない。

「ねえパパ、ぼくは本当は誰の子なの？」

目にいっぱい涙をためた颯太が見上げると、剛は一瞬、虚をつかれた表情になったものの、すぐに颯太の頭を乱暴に撫でて笑った。

「バカなこと言うなよ。颯太はパパの子だ、決まってるだろ！」

「そしたら3人でまた暮らそうよ」

泣くのを我慢しながら震える声で言う颯太の小さな体を、剛が腰を落として抱きしめた。夕陽に溶けていく父と息子の姿を遠くから見守っていた市山がぼつんとつぶやく。

「親子は血のつながりだけで成り立っているわけじゃない。過ごした時間によって、本当の親子になるのよ」